



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1984 精道教育促進協会 (芦屋)三・三四五二 芦屋市船戸町12-6

教皇様の聲

神の御母―聖マリア

マリアをながめると、私たち全員に対する神の愛のすばらしさが理解できる

託身の秘義を黙想するとき、神の御子をその御母と切り離して考えることはできません。それゆえ教会の信仰告白では、「聖霊によりて処女マリアより生まれ、人となり給えり」と唱えます。

エフエゾの公会議が「テオトコス」(神の母)という称号を聖母にあてはめたのは、託身の秘義の真理を保証するためでありました。神性と人性がキリストのペルソナにおいて一致していること、また、マリアをイエズスの母であると同時に神の御子の御母であらしめるような一致、このような一致をエフエゾに集う教父たちは主張したかったのです。マリアが「神の御母」であるのは、マリアの子が神であられたからです。人間を生んだという点でマリアは単に母でしたが、彼女が生命を与えた幼子は神でありましたから、当然、聖母は神の母であるわけです。

聖母は神の御母であると主張すれば、それは(託身の意義を明らかにすること)になります。みことば、つまり神のペルソナが人となられたことを示すからです。みことばが人

となつたのは、一女性が聖霊の御働きに与つたから、一女性が特別な仕方、救い主来臨の秘義に関わつたからでした。この女性を通してイエズスは自らの誕生以前の人間の世代につらなることとなつたのです。

マリアのお蔭で、イエズスは実際にこの世に生まれ、地球上のどの人間とも同じ生活を営み始めることができました。マリアはその母性を通して、聖霊の御働きにより生まれた神の御子が、その後、人間として成長し、人間の社会に自然に入り込み生活できるようにしたのです。

最高の尊敬

「神の御母」は託身におけるイエズスの人間性を強調する称号ですが、同時に被造物に与えられた最高の尊敬をも表わしています。教義の歴史をふりかえってみると、マリアにこの尊敬を認めるのはかなり難しいと思われような反対意見もありました。目も眩むばかりの深い秘義であるからです。しかし、この「テオトコス」(神の母)とい

う称号が問題になったとき、教会はずばやく反応して、マリアに「神の御母」という称号をあてはめるのは信仰の真理であることを確認しました。神であらせられるイエズスを信じる人なら、マリアが神の御母であることを信じぬわけにはいけません。

マリアに与えられた神の母としての尊敬を考えると、神がどれほど和解をお望みになつていitかがわかります。原罪が犯された直後、神は「女」と契約を結び、「人間はいずれ敵にうちかつことができるだろう」とお告げになりました。

「私はおまえと女との間に、おまえの末と女の末との間に、敵意をおく。女の末はおまえの頭を踏みくだき、おまえの末は女の末のかかとをねらうであろう」(創世の書3・15) この預言によると、女は神の味方として悪魔に対する戦いに加わるようになっていきました。女は、母、すなわち悪魔の頭を踏みくだく御方の母となるべく定められていたのです。ところで、旧約の預言をみるかぎり、女の末でやがて悪霊にうち勝つのは、ただの人間でしかありません。

ここで、ご託身のすばらしさが明らかになつてきます。預言の啓示を実現させる女の末とは、実はただの人間ではなかつたのです。その女の子であるゆえ、たしかに本ものの人間にはちがいないが、同時にまことの神であらせられました。神が女と結ばれた契約はここで新たな局面を迎えます。マリアは神の母として同盟に加わります。罪を犯した女に対して、神は、神の母となる恵みを得た完全な女性をお送りになつたのです。新しい契約は、単なる和解をはるかに越えて、想像を絶するほどのいただきにまで女性を高めることになりました。

完璧な母、賞賛すべき教育者

一女性が神である御方をこの世にお送りに

なつた、世の母たちと同じくその御方を育てる使命をお受けになつた、しかも、救い主がいずれ自らの使命を果たすことのできるよう母としての教えで準備する使命をお受けになつた。いつ考えても驚くほかはありません。マリアは見事な母でありましたが、それは彼女がすばらしい教育者でもあつたからです。イエズスは母に従つておられたという聖書の伝える事実を見ても、マリアの母としての存在が神の御子の人間としての成長に深く影響したことがうかがえます。これこそ、託身の秘義のおどろくべき点の一つではないでしょうか。

特異な仕方マリアに与えられた尊敬は、託身されたみことばが全人類に与えようと思つた尊厳をあらわしてあります。神の御子は自らを卑しめ、罪以外においてあらゆる点で私たちと同じ人間になってくださったわけですが、その結果、人間性そのものが神のレベルにまで高められました。神は人間との和解を実現させることによつて、罪に傷つた人間を、(人間としての)純粋、十全な姿にもどしてくださいましたが、実はそれだけでなく、人間に神的生命を伝え、神との親しさに入れるところまで高めてくださったのです。

このように、マリアをながめると、彼女だけでなく、私たち全員に対する神の愛のすばらしさが理解できます。マリアは神の偉大なわざを見せてくださいます。事実、神は罪の傷をもつ人類を癒すのみならず、神と親しく一致できる高所にまで高めてくださいました。マリアを神の母として敬うとき、主が被造物にお与えになつたすばらしい変化を認めることができます。それゆえ、神の御母、聖マリア」と唱える毎に、人類の顔がキリストの顔に変わるといふすばらしい現実を心の目で見ることもできるのです。

(一般謁見 一九八四・一・四)

小罪の赦しのためにも ゆるしの秘跡を

1 「愛に基づいて誠実に生き、あらゆる面
で(頭)であるキリストに向かって大きく成
長しよう」(エフェソ4・15)

みなさん、神のご計画によると、使徒聖パウロの言う霊的な進歩に専念する者にとつて、赦しの秘跡は特別の力をもつ手段です。重大な罪を犯してしまった信者にとつて、神の生命に立ち返るために、せひとも必要な手段である、(少なくとも誠実な心で告解の秘跡に与る望みをもつべし)——神はこのように決定

(昨年八月、教皇様はロザリオの祈りの栄えの玄義を先唱なさいましたが、そのとき数カ国語で玄義を簡単に説明されました。以下は仏語の説明を訳したものです)
聖ベルナデットのように純朴な心で熱心にロザリオの祈りを唱えましょう。

- 第一玄義—主イエズスのご復活をたたえよう
- 死と罪に打ち勝った御母をたたえましょう。
- 聖母マリアと共に、復活なさったキリストをたたえましょう。
- 世界中の信者の信仰を強めてくださるよう、マリア様にお祈りしましょう。
- 第二玄義—キリストのご昇天をたたえよう
- 聖母と共に、御子の天における栄光をよろこびましょう。
- 不死と神と共なる生命を取り戻してください

なさいました。

しかし教会は、キリストのみ旨を解釈し、小罪の赦しのためにもしばしば赦しの秘跡を受けよう強く勧めてきました。(『ローマ公教要理』秘跡の部参照、精道教育促進協会発行)
ピオ十二世がお教えになったように、解釈がこのように深められたのは、「聖霊の御働きのおかげです」(回勅『キリストの神秘』) 第二バチカン公会議も「キリスト教的生活を推進するために、告解の秘跡が非常に役立つ」

た新しいアダム、キリストを賛美しましょう。
希望を失った人々と国々、希望について知らない人々と国々、希望を攻撃する人々と国々を、マリア様に託しましょう。



ロザリオの祈り 栄えの玄義

第三玄義—聖霊降臨

聖霊が救い主に生命をお与えになられたりお使いになられたマリア様をたたえましょう。

最初の弟子たちに聖霊を与え、今、私たちに聖霊をお送りくださるイエズスをたたえましょう。

聖霊に忠実を保ったマリア様にお祈りして、教会の権威者と信者に同じ忠実な心をお与えくださるよう祈りましょう。

第四玄義—聖母の被昇天をたたえよう
ナザレトのマリア様、ベトレヘムのマリア

と繰り返し(『教会における司教の司牧任務に関する教令』30)、「司祭の職務と生活に関する教令」においても、次のように教えています。「秘跡の恩恵の役務者は諸秘跡を効果的に受けること、特に告解の秘跡をしばしば受けることによって、救い主であり牧者であるキリストに深く一致する。毎日の良心の糾明によって準備された告解の秘跡は、あわれみ深い御父への愛への欠くことのできない回心を大いに助けてくれるからである」(18番『公会議公文書全集』581頁)

さらに、赦しの秘跡に関する新しい典礼書の序論にも次のような説明があります。「小罪のためにも、定期的かつ頻繁に赦しの秘跡に与ることはすこぶる有益である。それは、単なる儀式の繰り返しでも、心理的な効果を狙うものでもない。たえず新たな心で洗礼の

様、神殿に主をささげたマリア様、カナの、カルワリオの、そして高間でのマリア様をたたえましょう。聖母は魂と体ともども栄えをお受けになりました。

いつの日か聖母と共に生きることのできるよう祈りましょう。
マリア様をご自分の昇天にかなうものとしてくださった主イエズスに感謝しましょう。
マリア様と共にいるよろこびと希望をお与えくださるよう祈りましょう。

第五玄義—聖母の戴冠をたたえよう
聖伝に従い、救い主キリストにならって霊的忠誠を保ちつづけたマリア様をたたえましょう。

み国の発展に聖母をあずからせてくださった主イエズスをたたえましょう。
教会の御母、宇宙の女王であられるマリア様、どうか御身の母親らしいお心で、全世界を保護してください。

(続いて教皇様は、主の祈り、天使祝詞、栄光唱を唱えられました。)(二九八三・八・十四)

恩寵に一層のみがきをかけることであり、キリストの死に瀕した状態を体に帯びている私たちの体に、イエズスの命が現われるためである。

先任者パウロ六世教皇さまにとつても、「頻繁に告解の秘跡を受けることは、聖性と平和、よろこびの源でありました」(『ガウデー・イン・ドミノ』使徒教令)

赦しの秘跡は固有の恩寵を与える

2 小罪は、秘跡あるいは秘跡外を問わず、他の方法によっても赦してもらうことができます。小罪とは、被造物に対する無秩序な執着のことで、完全には意識していないか、あるいは重大でない事柄に関する罪を指します。従って、神との友情関係は罪の程度に応じて弱められるとはいえず、その人のなかで全くなってしまうわけはありません。しかしまた、小罪は罪を犯す人に危険な傷を与えるということも見逃すわけにはゆかないのです。

以上の点を思い出してみると、小罪の場合もやはり告解の秘跡を通して赦しを受ける方がどれほどよいかがよくわかります。秘跡を通して赦しを受けるために小罪を告白するならば、「神のみ前で罪人である自分」に気づくようになり、償いに精を出すことができます。

私たちが贖うために居てくださったキリストの道具として、教会が有する仲介の役割を、この上なく個人的な私たちで再発見することにもなります。さらに、この秘跡に固有な恩寵を受けることができます。ですから、あらゆる種類の罪のうち克つ主イエズスに一致し、神が心に刻み込んでくださった、倫理面を深めるために必要な力のあることに気づき、またそれを使うことができるようになるのです。

こうして、痛悔する罪人は、「成熟した大人、すなわちキリストの背丈いっぱいになる」(エフェソ4・13) ように、また、「愛の教えに基づいて誠実に生き、キリストに向かって

説教・講話・書簡等の抄訳

大きく成長する」ために精一杯つき進んで行くことができるのです。

霊的指導

以上の神学的考察に、司牧に関する事柄を一つ加えておきたいと思えます。

「霊的すすめ」、「霊的対話」という表現を好む人もいますが、とにかく霊的指導は、赦しの秘跡外で、叙階の秘跡を受けていない人からも受けることができます。しかし、グループでなされる時のように個人的な要素がない場合は不十分です。また、赦しの秘跡と

〈新聞記者たち〉

真理を

伝えるため

極東への使徒旅行の帰途、インドネシア難民や中国司教、仏教との対話に関する教皇様の発言を政治的な意味でとらえようとする記者団に、教皇様は態度を明らかにし、あくまでも人道上の問題であると説明された。

人権擁護を話題にするとき、ある国の当局筋を非難するつもりはない。人間(人道上)の問題として話しているのです。万一、私のそのような発言を聞いて攻撃されていると感じることがあるとすれば、それは自らを有罪だと考えているからではないでしょうか。(パチカンラジョによると、その後教皇様は次のように説明をお加えになった。) 聖座の報道(取材)班には、私の発言の意図を正確に説明する努力をして欲しいと思っています。私の言葉が政治的な意味に受け取られることをさなければなりませんから。人々に真理を伝

密接なつながりのあるときが多いので、人生の「師」(エフェソ4・11参照)、「霊的な上長」(聖ベネディクトの戒律)、「博学な人」(『神学大全』補遺18問)、「神に関する事柄の導き手」(同上36問第一項)である司祭、すなわち「教会内で、特別のたまものを受けて」(同35問第一項)特別の使命の適任者となった司祭がその役目をもっていることは否定できません。かくして痛悔する罪人は、恣意的になる危険からまぬかれ、神の光を受けてみずからの召し出しを知り決定することができるでしょう。(一九八四・四・十一 一般謁見)

えるため、こまかしたり歪曲したりする人々の仮面をとりぞかなければならぬのです。わざと誤解される恐れはありますが、沈黙するわけにはゆきません。

次のように心のうちをお明かしになった。(沈黙の教会)があるとすれば、それは、話すべき私たちが使命を果たしていないからでしょう。そのような状態の教会を話題としてあげれば、私がルルドでメッセージを告げたヴェトナムの人々のように、大変よろこんで受け入れてくださるのです。(ある記者が「教皇様は難民という政治問題に触れられましたが、」と言ったのに対し、答えて)それは人道上(人間的な)問題であって、政治問題ではありません。国際的な視野からみて重要な人道上の問題です。人道上の問題であるゆえ、政治家は解決策を講ずる義務があるのですが、それを政治問題として取り扱うのはまちがいです。単に政治的な問題に帰することのできないものですから。報道関係の方々にはこの点をしっかりと認識してもらいたいと思います。人間の基本的な問題は、あくまで倫理(道德)上の問題なのです。(Il Tempo, 1984.5.13)

みなさん方の連盟に加わるためには、「カトリック教会の教えと倫理」を受け入れることが条件となる旨、お聞きしました。ところで、この条件には数多くの事柄が含まれています。まず、教会の教えを忠実に守るということで、このような態度は、個人、家族、社会、職業などの面で、はっきりと、またしっかりとあらわさなければなりません。カトリックの法学者にとって、職業倫理とは非常に独特な意味をもつだけでなく、非常に大切な要素でもあると言わねばなりません。福音の教えが決定的な役割を果たす分野にあって、宗教ぬきの、つまり単なる人本主義倫理で満足することはできないのです。

連盟のメンバーは個人的にカトリック倫理・道德の証人となるわけですが、連盟としての行動を通したとき初めて、本来の目的を達成することができ、また教会のなかで、存在価値が認められるものと思われまます。連盟は、司法、立法、行政の各分野で、あるいは公的、職業的分野で、キリスト教の倫理・道德を実現するために貢献しなければなりません。(…)

ところで、倫理・道德と法律とをなやませにすることはできません。法をまことの源泉に立ちもどらせ、最高規範に照らし合わせなければならぬのです。最高の規範を無視したり、あるいは、最高規範に反するとき、法は法でなくなってしまう。聖トマス・アクィナスによると、人定法が正義にかなうために、自然法に合致していなければなりません。第二パチカン公会議でも次のように宣言されました。「人間生活を律する最高の規範は、神的で、永遠、客観的、普遍的な法であ

法の目的は 共通善

り」(『信仰の自由に関する宣言』3)、人定法の真の価値を知り、かつ人定法を保護できるのも神法である。(…)

法の目的は共通善以外のなものでもありえない、つまり、法とは社会全体の善を計るべきものであることを片時も忘れるわけにはゆかないのです。

人間は本性上、どうしても社会生活を必要としますが、あらゆる社会制度の起源、主体、目的は人間でなくてはなりません。(『現代世界憲章』25参照(…))しかし最近では、このような分野の考え方が客観的な倫理から離れてしまい、往々にして、相対主義に染まり切っています。そこで、社会と人間の基本的な価値を認める考えとの間に対立が生じます。(…)

人間は、食物と住居と仕事を必要とする物理的現世的存在以上の存在です。なによりも、真理と愛、よろこび、確実性、生命の正当化などを要求する生きものである。いずれをとっても人間には本質をなす事柄です。ここから、社会が神的自然法に従い、先にあげたようなもろもろの価値を保護、育成すべきことがはっきりしてきます。

右のべたような価値に対して無関心をかこつような国家は分裂する以外に道はないでしょう。国家とは、人間の権利を保護するために、共通善の調和のとれた追求を目的とする組織ですから。

カトリック法学者のみなさん(…)みなさん方は実定法をふたたびその源、すなわち自然法に、またキリスト教倫理に、もどさなければなりません。

教会期待のこのような役割を、みなさん方が着実に実行なさることのできるよう、救い主キリストのよろこびと恩寵をお願いします。(一九八三・十二・五、カトリック法学者連盟総会にて。)

不変の教え

結婚の倫理

神によって定められ、人間が勝手に切り離すことの許されない不可分のつながりが存在する



「教会は、夫婦行為の一つひとつが、それ自体、生命の産出に向けられていなければならないと教えています。」(『フマーネ・ヴィテ』11)「教会の教導職によってしばしば説かれてきたこの教えは、夫婦行為のうちに共存する一致の意義と産出の意義との間には、神によって定められ、人間が勝手に切り離すことの許されない不可分のつながりが存在することを前提としています。(同上12)」

私がこれから考えようと思う事柄は、特に回勅『フマーネ・ヴィテ』の言う「夫婦行為の二つの意義」と「不可分のつながり」に関係があります。回勅全体を解説するのではなく、いくつかの点を提示し、吟味してみたいと思います。教理的な内容という点から見て、この部分は回勅の中心点と言えます。この箇所はまた、以前に述べた、婚姻の秘跡的しるしの面とも密接に関わっています。

前述したように中心点となる章句ですから、当然、回勅中もっとも重要な部分であります。それゆえ、関係章句全てを解説しないまでも、そこに含まれる種々の要素を注意深く検討しなければなりません。

忠実を保つ約束

秘跡的しるしについて考察したとき、すでに幾度かお話ししたように、しるしの根本は(『身体の言語』と称しうるものであり、それは、新郎新婦が互いに約束を交わすときに確

認したことからです。「一生の間、…つねに忠実を保ち、互いに愛し敬い合う」と誓い、二人は教会の秘跡の授与者となりました。

従って秘跡的しるしはたえず確認されるべき真理と関係があります。事実、「死に至る迄」結婚生活を続ける夫婦は、婚姻の日に秘跡の典礼を通して示したしるしを、たえまなく示しつづけているのです。

前述したパウロ六世前教皇の言葉は、夫婦の共同生活において、双方が、聖書のいわゆる「ひとつになる」(創世2・24)を実現するために行為を実施する瞬間に関わる問題です。それはすこぶる豊かな意義をもつ瞬間ですから、あの「身体の言語」にふくまれる真理を正確に「読み直す」(解釈する)ことが大切になります。この「読み直し」というか、「(身体の言語)の正確な意味をとる」ということが、真理にかなった行動をするための重要な条件となる。言いかえれば、価値および道徳規準に見合った生き方をするために欠くことのできない点であるということになります。

回勅はこの規準を示すのみならず、その根拠をも与えています。「夫婦行為がもつ一致の意味と産出の意義、その二つの意義の間にある、神が定められたゆえ人間が勝手に切りはなし得ない不可分のつながり、このつながりを説明するために、パウロ六世は次のように続けています。「事実、夫婦行為は、その深奥な本質にもとづいて、夫と妻をより親密

に結合させるとともに、男女の本性自体に刻み込まれてある法にしたがって、彼らを新しい生命の産出にふさわしいものとする」(『フマーネ・ヴィテ』12)

引用したところを見ると、テキストの最初はとくに「意義」に関するものであり、それにつづく文章は基本的な構造、つまり、夫婦関係の本質に触れていることがわかります。「具体的な構造」を定義するにあたり、テキストは「男女の本性自体に刻み込まれた法」という言い方をしています。

倫理規準の記述からその規準の説明および根拠に関する箇所まで、すこぶる重要で、回勅は、夫婦行為の倫理性決定規準の、根拠となるものを求めています。夫婦行為の本質、さらには、行為を行なう夫婦自身の本質のなかにその規準の根拠を求めているのです。

二つの意義

このようにして、夫婦行為の根本的な構造(本質)は、二つの意義を適切に読み取り、かつそれらを見つげるため、また、不可分のつながりをもつ二つの意義の正しい関係を確立するために、どうしても必要な基礎となります。ところで、二つの意義の読み取りは、夫婦の良心の場でなされるべきことから、夫婦の良心の場でなされるべきことから、夫婦行為は「夫婦を親密に結合させる」とともに「新しい生命の産出にふさわしいものとする」わけで、いずれも「根本的な構造を通して」実現します。従って、夫婦行為の二つの意義」と「行為の一致の意義と産出の意義」との両方を同時に読み取らなければなりません。

ここで問題となるのは、存在論的な面(根本的構造)の真理と、その結果としての主観的心理的な面(意義)の真理です。回勅によると、今問題にしている事柄は自然法の規準であることを強調しています。(一九八四・七・十二)(回勅の引用は中央協議会訳による。)

●紙代改定のお知らせ

昭和五十五年本紙発刊以来定価六〇円にておねがいをいたしておりました紙代を昭和六十年一月発刊号より定価一部七〇円に改定させていただきます。ただたくご通知申し上げます。

●年間購読料のご案内

一月号より十二月号までの年間購読料は八〇〇円となります。二〇部以上まとめてお送りする場合は送料・手数料は無料となりますが、一部から十九部まではこの場合も五〇〇円となります。

【例】四部の場合 八〇〇円×四部 十五〇〇円＝三、七〇〇円
教会宛二部以上まとめてお送りする場合は送料・手数料は無料となります。

●専用保存ファイル発売中

「教皇様の声」を約三年分保存できる専用保存ファイルがあります。定価六〇〇円(送料無料)ポリプロピレン樹脂製



「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円
■一年予約七百二十円送料七百二十円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393